令和5年度
ー学校巡回公演事業ー

国指定重要無形民俗文化財　公益財団法人 淡路人形協会

淡路人形座

～伝統芸能を楽しもう！～

「ー学校巡回公演事業ー」

小学校・中学校等において文化芸術団体による実演芸術の巡回公演を行い、子供たちが質の高い文化芸術を鑑賞・体験する機会を確保するとともに、子供たちの豊かな創造力・想像力や、思考力、コミュニケーション能力などを養い、将来の芸術家や観客層を育成し、優れた文化芸術の創造に資することを目的としています。ワークショップでは、子供たちに実演指導又は鑑賞指導を行います。また、実演においては、子供たちが参加できる工夫を行います。

文化庁

舞台芸術等総合支援事業（学校巡回公演）
独立行政法人　日本芸術文化振興会

～～～淡路人形座の紹介～～～

1964年に発足した淡路人形座は、260年以上の歴史を誇る吉田傳次郎座の道具類を引き継ぎ、何世代もの人々の創意工夫が重ねられ受け継がれた人形浄瑠璃を上演しています。

1998年に重要無形文化財義太夫節三味線保持者に認定された故鶴澤友路の弟子をはじめ、男性10名、女性４名の座員が淡路人形座で毎日公演する一方、国内外への出張公演、学校への出張講座、小・中学校、高校、子供会活動の後継者団体への指導、全国の伝統人形芝居保存会への協力など、伝統人形芝居の普及発展のための活動も積極的に行っています。

淡路人形座 － 公益財団法人淡路人形協会

～プログラム～

人形のお話と体験

戎舞

太夫・三味線のお話と体験

本朝廿四孝「奥庭狐火の段」

上演の前に演目の解説や、
お芝居の楽しみ方のレクチャーもあります。

座員紹介

太　夫

竹本友庄
竹本友里希
竹本友冨士
竹本友禧

三味線

重要無形文化財保持者
鶴澤友勇
鶴澤友弥

人形遣い

吉田新九朗　吉田史興
吉田廣の助　吉田徳蔵
吉田光太郎　吉田幸路
吉田千紅　吉田松永

音響照明スタッフ　マトヤ楽器

淡路人形芝居の始まり

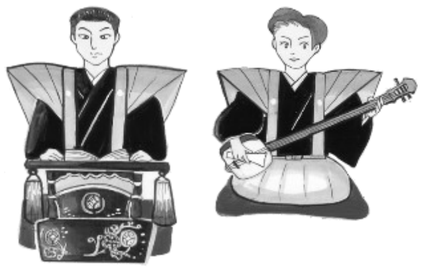
淡路人形の始まりはいくつかの説がありその一つに、西宮の戎神社に仕える百太夫という傀儡師（人形遣い）が淡路島へ渡り三條村の引田家にとどまり、人形操りを伝えたと言われています。

1570年、淡路人形の元祖とされる引田源之丞が京都御所で人形操りを奉納し、「綸旨」という天皇からの文書を賜りました。それから江戸時代の終わりまでの間、毎年正月元旦には、淡路島から12名の人形遣いが選ばれて京都へ行き「式三番叟」を奉納して天皇家一年の幸せを祈りました。

室町時代の終わりごろ上方（京都・大阪）で「浄瑠璃姫十二段草子」という牛若丸と浄瑠璃姫の恋物語が大評判で、その後このような語り物が浄瑠璃と呼ばれるようになりました。

江戸時代の初めごろに浄瑠璃と人形操りが結びつき、人形浄瑠璃という芸能が生まれました。

淡路島の人形遣いも、いち早く取り入れ、最盛期には淡路島だけで40座の劇団がありました。



太夫

浄瑠璃を語る人を太夫と呼びます。浄瑠璃にはたくさんの種類がありますが、人形浄瑠璃で使われる浄瑠璃のことを義太夫節と呼びます。

太夫は、お芝居に登場する人物のセリフから、心理や情景を一人で語り分けします。

三味線

三味線は、室町時代の終わり頃に中国の「三弦」という楽器が琉球（沖縄県）に伝わって「三線」という楽器になり、日本本土に渡り、今の三味線へと変化していったといわれています。現在のような三味線の形に落ち着いたのは、江戸時代になってからです。

三味線は、お芝居に登場する人物の性格やその場面の情景などをバチ先ひとつで表現します。

人形

初めのころは一体の人形を一人で遣っていましたが、現在は一体の人形を三人で遣います。頭と右手を遣う「主遣い」、左手を遣う「左遣い」、足を遣う「足遣い」、三人で息を合わせて遣います。

「戎舞」のお話

（あらすじ）

戎さまが釣竿をかついでやってきます。庄屋さんは家に招き入れお神酒を出します。気分の良くなった戎さまは、自身の生まれや福の神であることを語りながら舞い始めます。海の幸、山の幸を前に、人々の願いをかなえようと、お神酒を飲み、幸せを運んできます。戎さまは、船に乗り、沖に出て、大きな鯛を釣り、メデタシ、メデタシと舞い納めるのでした。

太鼓のリズムに合わせて、戎さまが楽しく舞うこの神事には、おおらかな心を持ち、プラス思考に生きるという幸せの原点が込められています。

「本朝廿四孝　奥庭狐火の段」のお話

作者：近松半二・三好松洛ほか
初演：1766年1月　大坂・竹本座

（あらすじ）

越後国（新潟県）の武将上杉謙信の娘八重垣姫と甲斐国（山梨県）の武将武田信玄の息子勝頼は、将軍の仲介で婚約していました。ところが将軍が暗殺され、両家に疑いがかかり、犯人を見つけ出せなかったために、勝頼は切腹を命じられてしまいます。悲しみに暮れる八重垣姫でしたが、死んだのは偽者で、本物の勝頼は花作りに身分を装って生きていることを知ります。

父謙信も、その秘密を知り、勝頼を暗殺しようとします。八重垣姫は勝頼に危険を知らせようとしますが、女性の足では追いつけず、諏訪湖も凍っているため船を出すこともできません。そこで八重垣姫は奥庭の御殿に祀っている「諏訪法性の兜」にお祈りすると、不思議な事に白い狐が現れます。八重垣姫は兜を手にして狐の霊力を借り、勝頼のもとへと急ぐのでした。